

東海村落の研究動向

交野正芳

戰後以降の東海村落の研究をあとづけようとするとき（東海といふ範域を、静岡、愛知、岐阜、三重の四県とする）、戰後段階、

一九五五年以降の日本経済の高度成長段階、一九七〇年以降の段階の三つに時期区分して、その研究主題の変遷をとらえることができる。その時期区分は、戦後日本社会の変動過程を画期とするものであるが、それは同時に東海村落の研究基調が、その変動の把握にあつたことを示すものである。

東海村落は、戦後日本社会の変動過程において先進的であった。そして、その先進的な変動の把握をひとつの研究軸とした。それに對して、東海村落の固有なあり方やその特性についての存続・変容をとらえる研究の展開を、もうひとつの軸としている。そこで、東海村落の研究の展開を、研究主題からみられるいくつかの事例にもとづいて、報告したい。

まず、戦後段階において、戦後諸改革の実行、戦後日本資本主義の展開という視角から、東海村落が問題対象とされた。農地改革の受容・進行過程を取り上げて、戦後諸改革が目標とした民主化の実現を、村落の支配構造の究明を基底にすえて、家族、同族、部落、行政村の構造との関連での、農民の意識・行動形成の追求、農民層の意識、行動様式、価値観等を主題とした調査研究、がひとつの傾向を形づくった。また、資本主義と村落の問題について、ダム建設による村落の解体・再秩序化が分析され、さらに、価値体系の相対性・歴史性という問題視角から漁村の結婚型態を対象に論じられた。戦後改革段階でのいわば、意識・行動主体形成の視点からの村落への接近は、そのごの変動過程を展望しながら、從来の農民運動の新たな組織形態への関心に結びつけられた。その関心のなかで村落

における半農半労の職工農家層（＝貧農層）と在村非農家層との連繫による運動組織（「給与者同盟会」）が評価され、そのこの日本経済の高度成長期における東海平場農村の工業化による村落変動が展望されていた。

このような日本社会の戦後展開を契機とした村落研究に対しても、山村・漁村におもな対象が求められた。東海村落の固有性・特性を著わす研究は、村落形成（成立）に拠る歴史的性格をもつた村落については戦前からの研究系譜があり、家・家族・同族・家連合の問題が取り上げられている。山村では飛騨白川村の大家族、非血縁的同族原理による村落形成を特徴とする奥三河の入混り村落における同族の形態と機能、などの研究に東海村落の特性にもとづく研究方向があった。また、山村に對置される漁村では、志摩地方を中心とした、漁業協同組合をめぐる共同体論、漁業村落の共同体的性格についての議論をはじめ、漁業形態と村落構造の問題、漁業生産における資本主義の展開、などがとらえられていた。その一方で、結婚形態、寝宿、隣居など生活慣行や習俗を通して、漁村における家・家族の視点からの村落構造論の展開があつた。

一九五五年以降、とりわけ六〇年代日本経済の高度成長段階において東海地方は、戦後日本社会のもつとも激しい変動のなかで、より先進的な問題状況を現出させた地域として、調査研究が相次いだ。技術革新、コンビナート建設をはじめ地域開発政策の展開、などによる東海地方の重化学工業化がもたらした村落の変容について、村落の外部社会の労働力市場の下層に構造化される農家・農民層を輩

出するかたちでの農民層分解の現実が、兼業農家の深化とともにとらえられ、さらに企業・自治体が変動主体となるメカニズム、生産・生活組織としての村落の解体、行政的再編成、こうした変動過程における住民運動の評価と展望、などが究明された。このような工業化と村落の問題は、農政と村落のそれとしても同時併行的に追求される問題となつた。基本法農政から総合農政への過程のなかで、それは農業生産・経営形態を通しての分析が、村落の分析にまで深められる必要がある、こんごの課題領域となつてゐる。

六〇年代の日本経済の高度成長は、東海の村落研究にとって大きな転機であった。それは、戦後日本資本主義にとって戦略的な地域となつた東海地方が、戦後日本社会の動向を巨視的にとらえることのできる地域であつたという側面をもつため、そうした巨視的な問題状況の把握のなかで、農民層はじめ地域住民の生活に根ざした追求すべき主題の設定という課題を提出した、ということを意味するといえよう。そのことはまた、村落への視点を、村落の残存・存続におくか、あるいは地域社会論というなかで村落の新たな形成・編成におくか、こうした視点の分化傾向を内包した状況をもたらしたものといえよう。

ところで、七〇年代、村落の「解体」状況に相即したコミュニティ形成という関心は、戦後改革期において農民・労働者あるいは地域住民という階級・階層規定をふまえた主体論が目指した主題を、東海の家・家族・村落研究として、より東海の固有性を析出する視点をうけつぐ課題を担つてゐるといえよう。また、京浜・阪神地方

の中間にある東海地方の地域的特性・性格の把握へと関心を拡大させる方向、中央レヴァエルからみた地方的事例としての東海地方の取り上げ、あるいは先進的事例として問題発見的な対象となる、などの視角や関心は、東海の個性の把握を普遍的な価値を追求する研究態度や方法のもとで、展開されることが求められよう。それは、從来の村研共通課題に集約されきらなかつた問題対象を、どういう問題意識で、どのような方法で、研究として集成するか、ということでもあろう。こうした意味では、六〇年代以降、東海地方がおかれただ先進的な問題状況のなかで問題関心が推移したなかに、今後の東海村落の研究課題と展望という点からみて、とらえ直すべき問題があるといえるのではなかろうか。